

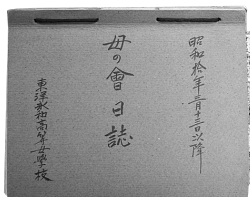
## 特集：母の会（2）

### 中高部母の会の思い出

牧野 安子

本年2月に中高部母の会主催第1回チャリティコンサートが開かれました。企画から運営、それぞれ御役の皆様の御働きは大変でいらっしたと存じます。無事盛会で終わられ、その喜びはさぞかしと心からお喜び申し上げると同時に、母の会会員として現役であった頃の事をあれこれと思い起こしております。

東洋英和と私のつながりも今年で40年になります。1967（昭和42）年に次女が小学部に御縁をいただきましたのはじまりに、4人の娘たちがそれぞれ東洋英和にお世話になることとなり、幼稚園、小学部、そして中高部と母の会の委員として伝統あるこの会の活動に長い間関わることができました。思いがけず1982年には中高部母の会会長の大役も仰せつかり、不安と戸惑いをおぼえながらも役員の方々のご協力のもと無事御役を努めさせていただきました。その折、初めて委員会室の書棚から手にとった歴史の重みある1冊の母の会記録簿が、図らずも私の生まれた年からはじまっていると知り何かとても奇遇に感ぜられたこと、規約にある母の会の目的をしっかりと胸に來たるべき百周年に臨みたいと気持ちを引き締めたこと等々、様々な事が懐かしく思い出されます。



#### ボランティアの会のこと

1982年度に私が中高部母の会の会長を務めさせていただくことになりました時の引継ぎで、前年度の宗教部長から、「聖書の集いの後おむつを縫うお仕事は、お届けする先方様（むらさき愛育園）へのお仕事に区切りがついたことも

あり、活動のあり方を見なおされてはどうか」という申し送りがございました。伝統のある母の会の大役を仰せつかった私にとりましては、あまりにもさみしいことで、私自身少し考えさせていただくことにいたしました。ただ、このお仕事に関して役員の負担が大きくなってきていたことも事実で、当時の定例委員会の記録にも役員間で繰り返し検討がなされた様子が残っております。

娘共々、英和で学んだ尊い敬神奉仕の精神、これは私たち母の会にも受け継がれて行くべきことだと思いました。一つ一つは小さな細やかな行いかもしれませんが、でも出来るときに出来ることを愛と祈りと感謝をこめて奉仕する事を英和の母の会の会員一人一人の気持ちとしてずっと続けてまいりたいと思いました。

高等部の教頭でいらした黒川先生をはじめ、前年度の母の会顧問で、当時、高2の娘の学年担任でいらした清野先生にもご相談申し上げ、何か私達でできる奉仕をと伺いました。そして、英和の保育者養成に尽力されたキュックリッヒ先生が創立した「愛の泉」愛泉乳児園への奉仕をさせていただくことでおむつを縫う活動を続けることにいたしました。あくまでボランティアの活動として行うこととし、運営の一切をご厚意で引き受けてくださったお世話役の方お2人



ボランティアの会 第1回愛の泉訪問（1982.7.12）

をお願いしました。母の会の委員も役員の立場でなく個人としてボランティアの会を支えていくことになりました。黒川先生より「おむつを縫う会に関してこの様な形で本年行うことは、母の会自体の願わしい姿勢であると思う。学校側としても感謝です。」とお言葉をいただくことができました。このような経緯がございましたので、現在では母の会の部の一つとなり、すばらしい活動を続けているボランティア部の様子を「母の会だより」などを通してうかがうにつけ、本当に嬉しい限りでございます。

そして娘の卒業後も有志で活動は続けられ、その会は愛泉園の森田愛香先生から「マルタとマリア」という名を頂戴し、今年で23年目を迎えさせていただきました。当時、7名で始まった卒業生の母親の集まりのこの小さな奉仕の会が現在は50名の会となり、毎月1回手作りの品々を作っております。時には会話も弾み、それはそれは和やかなお仕事会でございます。お互いに、無理をせず、出来るときに出来ることを愛と祈りと感謝をこめて奉仕する、この精神をずっと守っていきたいと思います。

### 聖書の集い・バザー・講演会のこと

〔聖書の集い〕それまで3年間ご尽力いただいた聖ヶ丘教会牧師山北宣久先生に引き続き1982年度には、鳥居坂教会牧師深町正信先生にご指導をお願いすることになりました。また、7月と10月には聖書科の佐藤順子先生と吾妻國年先生に、クリスマスの特別礼拝には牛込弘方町教会松永希久夫牧師にお願いいたしました。こうして母の会の会員の母親達も子供達と一緒にキリストの福音について教えをいただいております。

〔献品バザー〕当時は、秋11月に集会ホールにて開催いたしました。母の会委員、新聞部、宗教部、書記、会計、役員全員が力を合わせ、準備から、当日の販売、そして最後の片付けまで、それはそれは大変なエネルギーを出しました。お互いが励まし合いながら、出来るだけ無理のないように、楽しく、進めてまいったと思っております。学院の為に御奉仕が出来るこの喜びは何物にも変えられないことだと思っております。

〔講演会〕1982年の母の会主催の講演会は劇団「四季」の主催者で演出家の浅利慶太氏をお迎えし、「話し言葉としての日本語」という題で

お話を伺いました。「話し言葉」の大切さを教育関係者、家庭、社会で意識し、やがて日本中が美しく話せるようご協力下さいとの講演でした。言葉の乱れは文化の乱れに通じる事、私達母親もしっかりこの事をふまえ、日々、子供達と接していかなければと思いました。

当時母の会の一員として、母の会は学校そして先生方、家庭にある子供達との関わりを、母親としての自覚をしっかり持ちながら、物事にあたっていく事が大切と思っておりました。どのような計画も委員は、先ず学校、顧問の先生にご相談申し上げ、一歩も二歩も学校と生徒の橋渡しをする事を充分理解した上で、事を運んでまいりました。

### むらさき会のこと

ところで、冒頭でチャリティコンサートのことがきっかけとなり様々なことを懐かしく思い出したと申しましたが、それは何故かと申しますと、母の会主催のチャリティ行事と伺い、私が熱心に関わらせていただきました「むらさき会」のことが真っ先に頭に浮かんで重なったからでした。中高部母の会の活動からは少々脱線してしまうのですが、最後に触れさせていたきたいと存じます。

私が小学部の母の会役員をしておりました時、当時“村山源氏”で女性に人気の高かった村山リウ先生の講座を開講いたしました。毎年行われておりました「ぎんなんまつり」、バザーに代わっての小学部へのご協力ということで始まった会員制の講座です。「桐壺」から「宇治十帖」までを学びましたが、先生の講義はとても魅力的でございました。毎月1回第2火曜日、年10回の講義、幼稚園から中高部母の会会員、そして英和関係者にまで会員が広がり、1982年まで12年間続きました。

母の会の会員として過ごさせていただいた日々、自分一人ではない、お互いが助け合い、すべてに感謝して事にあたるこの様な出会いをいただいた事、このおつき合いは賜物でございます。あまりにも驚くばかりの殺伐としたこの世の中にあって、東洋英和女学院の母の会がこれからはしっかりと英和の心髄を受け継ぎながら活動が続けていかれることをお祈りしております。

(1982年度中高部母の会会長)

# 「マルタとマリアの会」の歩み

## —中高部母の会OGボランティアグループの活動について—

田口 多佳子

### 誕生の経緯と祈り（1984年4月）

今から四半世紀前、牧野会長、筒井宗教部長の時本格的奉仕を願って、先生方の尊いご助力の下、母の会に「ボランティアの会」を発足させて頂きました。その2年後、奇しくも創立百周年の年、卒業後も継続をとの私共の熱い願いとご奉仕先のご要望とが合致し「OG会」が誕生致しました。現役も含め10名足らずで自然発生的に活動を開始、正式な会名はその後愛泉乳児園園長の森田愛香先生にお付け頂きました。献身的に奉仕するマルタと主のみ言葉に心静かに耳を傾け祈るマリア（ルカ10：38～42）、姉妹の心即ち英和の建学の精神である「敬神奉仕」を会の礎とし、主に喜ばれる器として末長く活動して参りたいと深い祈りの中に歩み出しました。

### 主な活動内容と歩み

〔ご奉仕先〕福祉関係者の話等熟慮の末、英和の保育教育に貢献されたキュックリッヒ先生方がご創設の社会福祉法人「愛の泉・乳児園」（埼玉県加須市）を選定。先生の遺志を継ぐ方々が慈しみと祈りの中で、恵まれない方々に献身しておられる施設でございます。

〔ボランティアの会〕おむつを縫う会を年数回、礼拝の後、時にはケーキを頂きながら催しました。乳児園訪問は年2回、おむつをはじめ会員が心を込めて製作したお子様方へのプレゼントやバザー出品物・献品等のお届けと共に、午前中は縫い物の奉仕を午後は園の皆様と大変楽しいひとときを過ごしました。当時のお子様はすでに20代！折につけ愛らしい姿が目に見えます。

〔マルタとマリアの会〕会員は「愛の泉」の後援会員となり現役時代とほぼ同様の奉仕を続けて参りました。園の皆様との交わりは故郷に帰った様な懐かしさと喜びを与えられますと共に、多くの尊い事を教えられ本当に感謝致しております。

母の会との交流も折々に許され、近年は楓祭

母の会バザーに会のPRの為手作り品の出店をさせて頂きましたり、会の趣意書を卒業時に配布させて頂き大変有難く思っております。又「ボランティアの会」が部に改編されるまで「お世話役慰労会」（1984～97）を開催致しました。

さてお仕事会場は適当な場所がなく長年の懸案でございました。2003年名誉会員になられた故清野禮先生の献身のご尽力をはじめ学院の諸先生方のかたじけないお力添えにより英和の奉仕グループとして本部・大学院棟会議室を特別のご厚意の下、拝借させて頂くことができました。会員一同深い感謝を覚えつつ毎月第3木曜日の午後、ささやかな礼拝後各々の賜物を寄せ合いながら楽しくお仕事を催させて頂いております。

### 感謝と祈り

四半世紀前、産声を上げた小さな奉仕の群れが今日、母の会で、すばらしい部へ発展し、「マルタとマリアの会」も会員50名となり、20周年感謝会には愛泉乳児園園長森田先生をはじめ英和の諸先生方がご来臨下さり感慨深い有意義な会を持たせて頂きました。神様のお導き、学院の先生方ならではの深いご理解と温かいお力添え、そして役員をはじめ会員一同の熱い支えと献身的奉仕を改めて思い返し、筆舌に尽くせない感謝の念で一杯でございます。

20周年記念誌の表題は『思いがけない神の支え』と致しました。真に私共の思いを遥かに越えた神様のお支えとお恵みにより今日迄歩むことができました。今後も「敬神奉仕」を礎とし、会のモットーである「できる時に、できる事を、愛と祈りと感謝をこめて奉仕する」を心に銘記し、英和に蒔かれた尊い種を娘達と共に母親も大切にして、主のお導きの下に、奉仕の灯火を地道に楽しく末永く灯し続けて参りたいと切に祈っております。

（マルタとマリアの会初代代表）

## 〈思い出の先生がた〉14

### 静かなる威厳 — 榎村辨市先生の思い出 —

西野 和子

「ティーヤララタッタ、ティーヤララタッタ……。」榎村辨市先生の聖書の時間のことである。右肘を曲げ、人さし指を上に向けて立て行進の姿勢。先生は教卓の後を横に、黒板に沿って行ったり来たりされる。「ティーヤラ……。」と行進曲風のメロディーをくり返しながらかたを少し上げて。足音は無い。私達子供は三十数人。目を皿のようにしてシンと沈黙。先生を追い乍ら顔を左右に向ける。ヨシユアが神さまの御指示に従ってエリコの町の回りを行進し、七回まわって城壁が崩れる場面だったと思う。何しろ七十年近くも昔のことで記憶もさだかだけでなく、細かいことはみな忘れてしまった。けれど不思議にもこの場面だけは鮮明に私の中にヤキついているのだ。小鳥のようにお喋り好きの十才位の女の子達が、あんなにシンと引き込まれて、しかもむつかしい旧約聖書のお話に聴き入るなどということは正に驚きである。

榎村先生は私にとって、いや恐らく私達みんなにとっても非常に大きな存在でいらしたことは間違いない。小さい小学部であったから、毎朝の礼拝でも、普段の生活の中でも、お話を伺う折は沢山あった。静かなウラ声で淡々と話された。一度も大声で叱られた記憶がない。にこやかな静かな先生だった。にも拘らず常に巧まざる威厳に満ちていらした。

私達は子供だから、先生がどんなに偉い方か、小学部の部長さんでいらしたのかなどは全く関係がない。ただエライ先生らしい位にしか思っていなかった。先生方を恐れないのびやかな風潮のせいもあったかと思う。

私個人としては、毎月学校を休むような弱い子で、ひどくクタビレヤであったので、先生のあのりきみのない静かな威厳が大好きだった。左のオデコに小さな傷あとのようなふくらみがあったのを眺めながら、リラックスしてお話をうかがっていたし、お祈りで何度も「有がどうお礼申します。」と「どう」で少し声を上げて言われるのをマネしたりしたものである。ヨシユアの時だって、人さし指をピンと立て、でなくフワッと立てて小さなお声で歌って歩いていらした。それでも私達は吸い込まれるようにシンと耳を傾けていた。七十年たった今でも憶い出しているのだからこれこそ正に「お話の名人」

というべきではないか。課外で教わった算数なども、よくわかったと皆思ったものである。そういう、エライと思っていた先生を私達は友達扱いにして「カシベンが言った」などと話していた。一時が

万事、のびやかな小学生生活を頂いた英和に感謝している。世の中によくいわれる「イバル先生」などは思いもかけなかった。これも、もしかしたら、責任者でいらした（担任をお持ちでなかったから）榎村先生のおかげだったのかも知れない。そんなに敬愛していたのに、卒業後ただの一度のお便りもしなかったダメな教え子だったことを悔いてもおそい。突出した憶い出を語るだけで、先生へのおそまきの感謝とさせていただくことにする。

(1945年高女科卒、評議員・元理事)



#### 榎村辨市先生略歴

- |             |  |
|-------------|--|
| 1897年 3月24日 | 誕生   |
| 1915年       | 香川県師範学校卒業<br>香川郡上笠居尋常高等小学校訓導兼<br>香川県師範学校訓導               |
| 1917年       | 高松市二番丁尋常小学校訓導  |
| 1920年       | 私立広島女学校附属小学校訓導   |
| 1924年       | 東京市大日本体育会体操学校高等科<br>選科終了<br>広島女学校高等女学部教師に転じ専<br>門部、小学部兼務 |
| 1929年       | 東洋英和女学校専任教師に就任<br>(~1941.12)<br>初等科主事を務める                |
| 1997年 8月19日 | 逝去   |

## 〈資料紹介〉12 母の会関係資料（2）

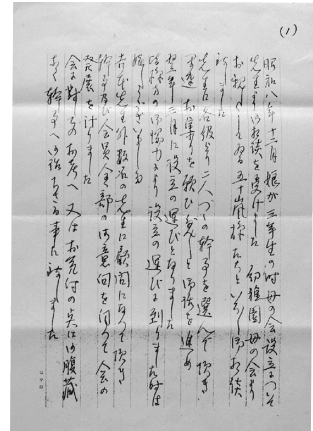
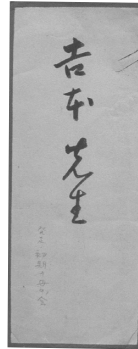
### 一通の書簡が語る中高部母の会創立の逸話

水谷 悟

東洋英和女学院中高部にとって、「母の会」の働きがどれほど大きいかは英和の教育に携わっている人間ならば誰もが知っていることだろう。しかし、その創立の経緯を知っている人間は決して多くないと思われる。史料室に一通の書簡がある。差出人は「伊藤和枝」、宛名には「吉本先生」とある。伊藤和枝さんは、中高部の前身に当たる東洋英和女学校「母の会」設立の発起者の一人であり、初年度の2学期に庶務をつとめるなど、草創期「母の会」の中心的な役割を果たした方である。一方、「吉本先生」とは、1918（大正7）年に着任し、途中留学期間などを経ながら、1954（昭和39）年に退任するまでの長い間、英語や聖書の授業を担当された吉本てう（旧姓・井出）先生のことである。先生はご自身東洋英和の卒業生（1918年3月高等科卒）であり、教員側の庶務をつとめるかたわら、母の会総会の席でハミルトン校長の通訳も引き受けるなど、初期の会の活動に大きく貢献されていた。この便箋7枚に及ぶ手紙は創立当初の母の会の様子を伝えてくれる。まずはその冒頭部分を見ていこう。

昭和八年十二月娘が三年生の時母の会設立について先生より御相談を受けました。幼稚園母の会よりお親しくしてある五十嵐様たちといろいろ御相談致しました。先生に各級より二人づつの幹事を選んで頂き、早速お集りを願ひ、だんだんと御話を進め、翌年（翌々年か）三月に設立の運びとなりました。皆様方の御協力により設立の運びに到りました時は嬉しくございました。吉本先生外数名の先生に顧問になって頂き、幹事及び会員全部の御意向を伺って会の発展を計りました。

この手紙によると、発端は、1933（昭和8）年12月に吉本先生が伊藤さんらに対して「母の会」設立の相談を持ちかけたことに始まる。母体はすでに設立されていた幼稚園「母の会」であり、その最初の学年が進級していくなかで、女学校



にも「母の会」が必要との声があがり、結果、各クラスから2名ずつ幹事を選び、翌々年3月に設立に至ったのである。

さて、発足間もない母の会が第一に手掛けた仕事とは、何だったのだろうか。それは、「洋傘を各組に供へつけること」であった。急な天候の変化があっても生徒たちが安全に帰宅できるようにとの配慮から提案されたものであり、当初、各クラス5本、各学年2クラスで5学年、合計50本を用意し、年々本数を増やしていくことに決めた。『値段の明治・大正・昭和風俗史』（1981年、朝日新聞社）によれば、1935年当時、白米10kgの値段は2円50銭、大工の手間賃1円89銭、教員の初任給は50円であり、1本1円50銭の洋傘は決して安価とはいえない。また、その管理は、各クラスの担任に任されており、現在でも、急な雨の際に、生徒が学校の傘を借りて職員室を訪れる姿が見られるのは、この「洋傘」を出発点としているのかも知れない。この決定をうけ、早速、幹事が浅草の洋傘問屋へ出かけて交渉し、学校名の入った柄を頼んで帰る途中、突然の雷雨に遭い、傘がなくて濡れてしまったという微笑ましいエピソードが紹介されている。

しかし、「母の会」設立の年代を考えると、それがいかに厳しい状況下にあったかを想像す

る必要がある。設立の年1935（昭和10）年前後は、戦前の日本にとって一つの転換点といえる年であった。時の総理大臣岡田啓介が折からの「天皇機関説問題」の高まりに対して「国体明徴声明」を出し、国家の方向性を大きく転回させていた。思想統制・宗教統制は一段と厳しくなり、同年4月には文部省が「国体明徴」を訓令、子供たちは「すめらみくにの子ども」とされた。軍部の政治介入は年々激しさを増し、国内の経済不況を、海外進出で補おうとする軍国主義の波が、日本を呑み込みはじめていたのである。

創立50周年を迎えた英和は、1934年5月に財団法人の設立が文部大臣の認可を得たばかりで、学校として、従来の私塾的形態を脱し、近代的な教育機関となろうとしていた時期であった。「規約」第二章「目的」の項目には、「本会ハ家庭ト学校ト密接ナル連絡協同ヲ保チテ、子女教養ノ向上ヲ促進シ母性タルノ修養ニ努メ、且ツ同校教育ノ主義ヲ翼賛シ、会員相互ノ親睦ヲ以テ目的トス」とあり、具体的な活動としては、年1回の講演会開催、教員との懇談、会員相互の親睦が挙げられている。だが、その背後には、文部省から御真影の奉安につき詰問されるなど、時代の影が忍び寄っていたのである。そのような厳しさをより一層教えてくれるのが、次の一節である。

私にとって忘れられませんのは娘の卒業直前の幹事会でございました。二二六事件がその日に起りました。電車も省線も程なく方面によって運転休止との事を聞きました。徒歩でも帰られる生徒さんはよるしいが、遠くからの方々はと考へまして、急ぎ自動車で学校へかけつけ、すぐ校長先生に右の御話を申し上げ、今のうちに早く生徒さん方を御帰へしの方がよいでせうと申上りましたら、早速授業を止め御帰へしになりました。時間が早かったので皆様御無事にかけられたと、あとで伺ひ御話し申上てよかったですと思ひました。学校には先生方と私ども幹事たちだけとなりました。雪は降ってをりましたし、電車も省線も止まった様子で、朝の騒々しさに引きかへ余りにも静かで 気味の悪い程でした。窓越しに見える降雪が一層不気味さを加へて居りました。

1936年2月26日、「母の会」設立以来第1回

となる卒業生の母親たちが学校および教師への御礼について相談するために集まった、「最後の幹事会」の日のことである。その日は、大雪に加え、陸軍皇道派の青年将校によるクーデターで、帝都東京の心臓部が完全に機能を停止していた、いわゆる二・二六事件当日であった。緊迫する雰囲気の中、心配した「母の会」幹事の呼びかけもあり、授業は急遽中止、全員集団下校となったという。学校に残されたのは、教員と「母の会」幹事のみ。都会の喧騒が一転して静寂となり、しんと降る雪に「無気味さ」を覚えたという発言は、間違いなく時代の証言といえる。その後、伊藤さんも知人の自動車でも送ってもらったものの、至る所に兵隊が立ち並び、道路の封鎖に伴う渋滞に巻き込まれ、いつもの四倍近い時間がかかってしまう。帰宅した後、幹事同士で電話連絡を取り合い、全員無事であることを確認し、ほっと胸をなでおろしたという。「今になりましたすべてが夢のやうな思ひ出でございました」と回想できるのは、それから十有余年経た戦後になってからのことである。

このような状況にあつてなお自分の娘と学校を守ろうとする優しくも勇ましい「母の会」の姿が垣間見え、まさに母は強しの感を強めてしまう。果たして、戦争が激しさを増し、銃後の社会における女性の役割が固定されていくなかで、英和「母の会」はどのような活動をしていくことになるのか。さまざまな教育問題が叫ばれる現代において、今一度、「母の会」設立当初に定められた「目的」とその活動に目を向けたい。「敬神奉仕」の建学の精神を支え、時代のなかでそれを体現しようとしてきた「母の会」の姿勢とその歴史に、われわれは改めて学ぶ必要があるのではなからうか。

（中上部教諭・史料室委員）



二・二六事件当時の学校周辺

- \*『尚志』No37(「赤い靴の女の子関連の地域と人々」収録、『尚志』No38(「赤い靴関連統制と大逆事件」収録)
- \*『Beauty Book 美しくなる食事と美容』(高等部及び短大卒ジュニー牛山著)
- \*『白蓮 娘が語る母燐子』・「伊藤伝右衛門邸案内」ほか飯塚市関係資料
- \*『激動のなかで 混乱期における日本人理事による理事会記録』(興望館関係資料)
- \*『戦いと安らぎと』(高女科卒・元評議員中里昭子著)
- \*CDブック『いつもあなたのそばにいる 1000の風になって』松岡裕子(高等部及び短大卒・評議員)関係資料
- \*『ヴォーリスさんのウサギとカメ』
- \*『同志社叢』27号・『新島研究』第98号・『同志社社史資料センター報』第3号
- \*『あゆみ』第53号(フェリス女学院資料室)
- \*『成瀬記念館 2006』No21ほか日本女子大学関係資料
- \*『研究叢書第7号 大学史資料の公開と活用』・『大学アーカイヴズ』No36・『全国大学史資料協議会西日本部会会報』No22
- \*『京都大学大学文書館紀要』第5号・『京都大学大学文書館だより』第12号
- \*『武蔵学園史年報』第12号
- \*『中央大学百年史 編纂の記録』
- \*『東北大学史料館だより』第6号
- \*『関西学院史紀要』第13巻
- \*『アルケアー記録・情報・歴史一』(南山大学史料室)
- \*『山田顕義の生涯』(日本大学)
- \*『福澤研究センター通信』第6号ほか慶応義塾大学関係資料
- \*THE HISTORY OF DOKKYO(冊子)ほか獨協大学関係資料
- \*『北海道大学大学文書館年報』第2号
- \*『大阪市立大学の101~125年—第2世紀への出発1981~2005年』『大阪市立大学の125年—1880~2005—』
- \*『大学史紀要』第11号・『大学史資料センター事務報告』第28集大学史活動・「ニュースレター 明治大学史」vol.2
- \*『神奈川大学史資料集』第23集
- \*『立教大学の歴史』
- \*『成蹊学園史料館資料集③成蹊学園年表(稿本1)1944(昭和19)年以前』『成蹊学園史料館年報』2006年度

- \*『関東学院学院史資料室ニュース・レター』No10
- \*『校史』vol.19ほか國學院大學関係資料
- \*『法政大学大学史資料集』第28集・「法政大学大学史編纂室ニュース」vol.No4
- \*『新しいうたを歌おう 神戸女学院大学音楽部100年の歩み』
- \*『桃山学院年史紀要』第26号・『桃山学院の歴史 開学50周年にむけて(歴史パンフレット①)』
- \*『東北大学史料館紀要』第2号
- \*『武蔵野美術大学大学史資料集』第五集
- \*『駒大史ブックレット6「図書館誌」にみる駒大図書館史【その2】』ほか駒沢大学関係資料
- \*『大東文化歴史資料館だより』vol.2
- \*『キダ公式書簡集 ゆるぎない信仰を女子教育に』
- \*『九州大学大学史料叢書』第十五輯、『伊東祐彦関係資料目録』『九州大学大学文書館ニュース』第28号・29号
- \*『皇學館大學所蔵大学史目録』(増補版)
- \*『広島大学文書館紀要』第9号
- \*『捜真学院120年誌』

#### 購入資料

- \*『喜びの本』『令女小説 春の歌』『随想集心の窓から』[村岡花子関係]
- \*『平岩愼保伝』(倉長巍著)
- \*『江原素六傳(新版)』(清水由松校閲)
- \*『開花の築地・民権の銀座』、『明治キリスト教の流域』(太田愛人著)
- \*『青山の墓碑銘』(クランメル著、気賀健生訳)
- \*『海に還る 女優・賀原夏子』
- \*『彷彿月刊』19巻2号(特集:「柳原白蓮 大正十年のスキャンダル」)
- \*レコード「めえめえ子山羊」(川田正子関係資料)

#### 史料室よりのお知らせ

- 2007年11月より本部・大学院棟1階ロビーにて展示活動を開始しました。学院史料を順次紹介していく予定です。お立ち寄りの際は是非ご覧下さい。
- 「母の会だより」No2を探しております。ご提供いただける方がありましたら下記までご連絡いただければ幸いです。  
〔連絡先〕東洋英和女学院史料室  
TEL03-3583-3325(代) FAX03-3583-3329(直)  
E-mail:archive@toyoeiwa.ac.jp